

よわよわペットのとりとりおもらし　く甘々尽くしく

目次

よわよわペットのとりとりおもらし　く甘々尽くしく　1

姉さんはイタズラっ娘　く休日電車で愛されてく　22

おまけ

夢見心地の甘い夜に　46

弟、それでも男の子　48

奥付・後書き　50

※「よわよわペットのとりとりおもらし　く甘々尽くしく」はピクシブ、ノクターンノベルズに投稿した同名作品を一部修正したものとなります。あらかじめご了承ください。

よわよわペットのとろとろおもらし

く甘々尽くし

ご主人様の指が動く。真新しい固めのボタンがするすると外れ、はらりとシャツがはだける。更衣室に漂う涼しい空気が僕の胸板をひやりと撫ぜた。

「どうかどうか、どんなことでも申し付けて下さいませ……♡」

忠誠を誓うはずなのに、僕の頬はふにやりととろけてしまう。両目を潤ませ見上げる僕を前に、ご主人様の新緑の瞳が静かに緩んだ。

「ああ。ここにいる間は特に……な♡」

しつとりと落ち着いた声。穏やかな声色。静かな言葉。それなのに、僕の心臓はどんな鼓動を速めていく。

下着は籠へ、シャツとタキシードはハンガーへ。シワひとつない立派な一張羅の真横で、持ち主のはずの僕は文字通り一糸纏わぬ姿を晒していた。所謂普通の人なら、内股になったり股間を手で隠したりするのもかもしれない。けれど。

「えへ、えへへえ……♡」

口元の緩みが止まらない。漏れ出す笑みが抑えられない。勝手に太ももが開いていく。ひとりでに両手がピースサインを形作る。ご主人様の視線の先へとさらけ出されたおちんちん——精一杯に勃起しても、人差し指くらいの長さしかないはずかしいそれ——がぶるぶると左右に揺れた。毛は一本残らず剃り落してあるから、どれほどはしたなく勃ってしまっているかが一目瞭然だった。

ご主人様の眼差しが僕をまさぐる。両足を舐め上げて、睾丸……たまたまを撫でて、細い腰をさすり上げていく。普通にお傍に立たせて頂いても、僕の頭はご主人様の肩にも届かない。媚びへつらうようなガニ股が、その身長差を更に絶対的なものにしていった。

すつと鼻筋が通った彫の深い顔立ち。短めに揃えた茶色の髪。輝くような翡翠の瞳。どこまでも色濃い漆色のドレスが、本来の気高い雰囲気より強く印象付ける。ただ見上げているだけでも時間を忘れそうなのに……ふと、ご主人様と目が合う。

「ああ……ごしゅじんさまぁ……」

あまりにも凜とした御顔。きりりとした眼。見惚れ蕩けて腰が痺れる。だらしなない声と共に涎が垂れてしまう。それなのに。

「ふふ……♡」

その頬が、口元が、柔らかくほころんだ。鼓動が止まる。白く透き通った指先が首へと触れて、おもむろに顔を引き寄せられて。そつと身をかめ顔を寄せて下さって。気付いた時には……目の前にご主人様がいた。唇にぬくもりが触れていた。

長い長い、穏やかな絶頂。心が溶け落ちる天国。ご主人様の唇が静かに離れた時、僕の腰はがくがくと震えていた。とめどなく漏れ出す先走りか床へぼとぼと垂れ落ちていた。

「これからしばらく、キミは私の犬だ。分かったな？」

小首を傾けとろりと笑い、仄かにときめく瞳を向けられて。

「ワンッ♡」

僕は舌を突き出していた。ご主人様の笑みが深まるのが分かった。

「良し。なら……いつもの、だ」

ご主人様が鞆を開けた。僕がご一緒しているんです、どうか荷物はお任せくださいませ。と何度も何度も申し上げたけれど、これだけは私が持つと頑として譲られなかった鞆。微かな金属音と共に姿を見せたものは、艶やかに黒光りする革製の首輪とリード。職人さんに依頼してサイズを測り、僕の名前を箔押しで刻むことまでして下さった特注品。世界でたった一つの首輪。ご主人様が僕に下さった……宝物。

「ふふ、なんて顔をしているんだ」

首元へ手を伸ばしたご主人様がぐすりと笑った。未だ舌を突き出し、ぼろぼろと涙まで零す僕の間抜け面。一体どれだけ無様なんだろう？　どんなに情けないんだろう……♡

「まあいいさ。苦しかったらきちんと鳴くんだぞ？」

平然とした声色。そつと首筋をなぞってくださった指先。おちんちんがびくりと跳ね狂う。

「ワ、ワン……ワンッ♡」

精一杯の鳴き声に、ご主人様は優しく顎を撫で上げて下さった。

「うん。良い格好だな」

ご主人様の声が頭上から響く。落ち着かれたその一言だけでも、目頭がずっと熱くなるのだけだ。

「わ、わうう……」

「ああ、いいぞ」

お許しの言葉と共に、ご主人様が軽くリードを引いた。喉仏が押し込まれ、思わず涎が垂れかける。慌てて飲み込み、僕はそつと顔を寄せた。

「ん……♡」

触れるだけの口付け。甘いひと時。でも、交わす相手は唇じゃない。頬でもない。いや、身体ですらない。

返ってくるのは艶やかな感触。滑らかな革とその冷たさ。

「~~~~♡」

生まれたままの姿で、首輪とリードだけを付けて、土下座をして。僕はご主人様のお靴へと口付けていた。股間どころか身体中が甘く沸き立つ。少しでも刺激が加われば、途端に精液を漏らしてしまいそうだった。

「分かっているとは思いますが、触れるだけだぞ。いいな？」

「ワンツ」

キスしていいのは足の甲だけ。触れる以上はしてはいけない。何度も繰り返されたご命令だった。

以前勝手にお靴を舐めあげ、深く深く口付けてしまったことがあった。その時の烈火のごとき怒りようは今でもよく憶えている。

「いくら磨いたと言えども、外を歩いたばかりの靴だぞ！？ 汚れていることくらい分かるだろう！ 身体を壊したらどうするつもりだっ！」

……あんなにお怒りになったのは初めてで、そして今のところあの一度きりだった。僕がヘマをしてご主人様の論文を台無しにしてしまった時ですら、あんなに激しく怒られはしなかったというのに。

ともあれ。甘美な感触と思い出に酔い続けるわけにもいかない。動きたがらない首へと無理矢理に命じ、引き剥がすようにして唇を離す。いつまでだってこうしていたいけど、それは僕だけのわがままな願い事。それに、これからさせて頂くことだって……♡

身体を起こして足を崩す。そのまま仰向けに、ご主人様の見下ろす先へゆつくりと寝転がる。床の硬さと冷たさが背中を襲ったものの、身体中から湧き出す熱が軽々と寒気を追い払った。

「わうう……♡」

見上げ仰いだ先にあるのは、鋭く知的なご主人様の顔立ち。闇夜の色をしたロングドレスは殆どの素肌を覆い隠し、頬の白さをより際立たせる。宝石みたいな瞳をただ見上げているだけでも、胸が一杯に満たされはち切れそうなのに。

その端正な御顔が僕を見つめ返して、とろんと蕩けて下さったりしたら。

「~~~~♡♡」

涎が止まってくれない。口の端から、おちんちんから、だらだらどろどろと漏らし続ける。胸がきゅんきゅんと疼く。開ききった太ももが勝手に震えて止まらない。

大好きなご主人様、全てを捧げたご主人様。そのお方の足元で仰向けに寝そべり、身体の全てを視姦^みて頂けるだなんて。太ももをM字に大きく開いて、おちんちんをぶるぶると震わせて。舌を出して、両手を開いて。急所も、尊厳も、命すらも。なにかも全てを曝け出す……絶対服従、屈服の証。

「とてもとても……無様な姿だな」

仄かに上気した白い頬。熱を帯びた声色。冷たいのは唯一言葉だけで。

「かわいいぞ……♡」

その言葉すらもすぐさま甘く染まっていく。

「わう、わ、わぁん……」

舌がもつれて動かない。毎日毎日鳴き声の練習を繰り返してきたのに。今にもご主人様と呼び縋^もってしまいそうで、ただただ必死に抑え込むばかり。

どうしてこんなにも駄犬なんだろう？ ご主人様だって、もつときちゃんと舐^なられた忠犬のほうがいいんじゃないのだろうか？ 一瞬よぎった疑いは、リードを引く感触に消し飛ばされる。

「さあ、行こうか♡」

ただただ見惚れてしまうその笑顔に、僕はこくりと息を飲んで。

「わぁんっ♡」

と精一杯の鳴き声でお応えしたのだった。

石造りの大部屋は淫らな空気に満ちていた。あちらこちらに置かれた燭台から揺らめく光が放たれ、いくつもの影が床へと落ちる。程よい薄暗さがより一層の妖しさを醸し出していた。

蠟燭が燃え進む小さな音。手錠が擦れ合う金属音。反響する鞭の音。そして何より……色とりどりの嬌声。責め立て苛むことで、あるいは責め立てられることで漏れ出す悦びの声。時折混じる子供の笑い声。無邪気さ故に残酷な嘲笑が、愛し合うものたちをますますそらせ昂らせていく。

ここは大人の社交場。内に秘めた欲望を解き放ち、共有し、快楽を貪るために作られた秘密のクラブだった。

そんな場所で、首輪をつけた犬のすることは一体何か？ 考えるまでもない。

「舐めろ」

静かな、そして有無を言わさぬ声。別人のような冷たさと共に差し出して頂いたのは……ご主人様の素足だった。

「ワッ！」

待ち侘びたご奉仕……いやご褒美。漂う香りに涎を滴らせ、僕は夢中で口を開いた。まずは親指。ぱくりと一口で啜え込む。

「~~~~っ♡」

今日一日、ずっと革靴とタイツに覆われていたおみ足。蒸れて湿って、たつぷりと匂いの籠った足指。ご主人様の汗に加え、微かな酸っぱさが混じった味。どこかすえたようにも感じる魅惑の香り。もつともつと欲しい。ほしい、ほしい……っ♡

口をぎゅっと窄める。味わい尽くそうと舌を回す。歯だけは絶対に立てないようにと気を張り巡らすことも忘れない。

「なんともまあ……酷い有様だな」

ぽつりと聞こえてきたご主人様の声は、どこまでも冷め切っているようだった。見下ろす視線が頭に浮かぶ。僕は四つん這いになって飼い主様の足指にむしゃぶりつくようなオス犬なんだ。どんな御顔で見下されているかなんて、見えなくなつて簡単に想像出来た。背筋の熱が増していく。

綺麗に整った足の爪。つい先ほど短く切り揃えさせて頂いた上に、丁寧なやすりがけも欠かさなかった。お陰でどんなに舐めても舌に引つかかることは無い。だから一切の躊躇無く、爪と皮膚の間まで残さず余さず舌を這わせる。舐め漏らすなんて嫌だった。絶対絶対、嫌だった。

たつぷり時間をかけて、ようやく親指一本を味わい尽くす。吸い付いていた口をそっと離すと、一筋の銀糸がぬるりと後を引いた。同時に溜息の音が耳へ届く。呆れたようなその響きに、僕の腰はぶるりと震えた。

ご主人様が足指を開く。丁寧に手入れされた細く美しい足指。マゾ犬の唾液で覆われてしまった親指と、まだまつさらな人差し指の間。そこに広がる魅惑の谷間が僕の鼻先に晒される。親指よりももっと籠ったかぐわしい薫り。ごくんと唾を飲む音があたりに響き渡った。そんな気すらした。

たまらず舌を突き出し顔を寄せた瞬間。

「待て」

たった一言。冷ややかなご命令に僕の身体はぴたりと固まった。緩みきった表情のまま、間拔けに舌を伸ばしたまま、凍りついたように身動きが止まる。

耳をそばだてて次のご命令を待つけれど、聞こえてくるのはご主人様の息遣いばかり。周囲の嬌声や笑い声は遠くぼんやりと霞み、微かな筈のご主人様の息だけが色濃く鮮明に届く。舌から唾液が垂れ落ち続けるのは、きつと口を開けているせいだけじゃなかった。そのままどれくらい時間が経ったのだろうか？ 僕の身体は痺れ、両手と膝に痛みを覚え始めていた。けれども心臓の鼓動は全く収まらず、唾液も変わらず流れ落ちるまま。低能な愛玩動物に出来るのは、ただただ愚直にご主人様のご命令を待つことだけだった。

「よし」

弾かれたように身体が動く。むしろぶりついた僕を迎えて下さったのは。

「~~~~っ♡♡」

程よく乾いてより濃厚になった、ご主人様の足指達だった。オアズケのお陰で敏感になつていた舌にしつとりと濃い味が染み渡る。痺れも痛みも嘘のように消えていく。煮え立つような涙が頬を濡らしていった。

一本一本の指とその間へ、余すことなくディープキスを交わす。浅ましい家畜が晒す見るに堪えないひよつとこ顔にも、ご主人様は何も言わずにいて下さった。

長い長い足指フェラチオ。親指から小指までを舐め尽くして味も匂いもすっかり薄れた頃、僕はゆっくりと口を離した。べとべとに濡れた足先は蠟燭の灯りに照らされ淫らに輝いていた。

「あちらが噂のお方ね、それと。ペット君」

「うわあ、すごい羨けっぷり。しかもあの子ってじゅう……」

「それ以上は駄目だよ。一応は、ね」

ふと、周囲のざわつきが耳に入ってきた。気付くとギャラリーがぼつぼつと集まってきた。ご主人様のように。ペットを連れた女性、人のプレイを見に来た独り身の男性、首輪と口枷を嵌められた中年らしき男性。様々な人の声がご主人様と僕を包み込む。

ぐいと強めにリードを引かれ、つんのめりそうになるのを慌てて堪える。顔を上げた僕は息を飲んだ。

「……………」

静かに風いだエメラルドの瞳。何も変わらない冷たい御顔。二人きりのお部屋で羨けて下さる時と、寸分違わぬその表情。頭の芯が貫かれる。びりびりぞくぞく震えが走る。

分かる。何も仰らなくとも分かる。何を指望みなのか……僕みたいな愚犬にも分かるようにお伝え下さっている。だから僕は小さく鳴き声を上げた。

四つん這いから再び仰向けへ。名前も知らない誰かの前で、男女入り混じる公衆の面前で。股を開いて、両手を開けて、口の中までご主人様にお見せして。無抵抗を証明する姿勢。服従の証。そして更に……ご主人様の所有物であるという宣誓。

どよめく観客を気にも留めず、ご主人様はおみ足を伸ばした。さっき僕が舐めさせて頂いた右足。ぬらつく指先が、煌めく指の間が、まだ手付かずだった足の裏が。僕なんかの顔に寄せられていく。そして。

「♡♡」

嬌声、というよりは息が漏れる音。跳ねる腰と零れる音を、僕は抑えることが出来なかった。

僕の顔へ、飼い犬の顔面へ、無造作に置かれたご主人様の足裏。踏みつけるわけでもなく、踏みしめるわけでもない。ただただそこに置かれただけの足。特別なものは何も感じない。足置き台に置くのと何も変わらない自然さ。下半身がみるみる緩み、ぴゅくりと先走りが漏れ出すのが分かった。

僕の身体に、僕の股間に、色とりどりの視線が突き刺さる。好奇と興奮と、恐らくは嘲りの入り混じった視線。中には綺麗な女性のももの——最も、ご主人様よりも綺麗な方なんていないけれど——あるだろう。でも、そんなことはどうだってよかった。何の意味も無かった。

「これは丁度いい。次に移ろうか」

落ち着き払ったご主人様のお言葉に、心臓がどくと跳ね上がった。

「えっと……その、本当にいいんですか？ 貴方の飼い犬なんですよね？」

二十歳そこそこに見える黒髪の女性がおずおずとご主人様に問いかけた。ご主人様の御顔と手元のリード、そして僕の首輪へ順繰りに視線を彷徨わせている。

「ああ、構わない。さっき言ったことさえ守ってくればいいんだ」

微笑みと共にご主人様が答える。穏やかな声色に背中を押されたのか、若い女性は僕へと向き直った。

「そ、それじゃあ……おすわり！」

「ワンッ！」

間髪入れずに僕は鳴く。膝を広げて両手について、命じてくれた女性を見上げる。舌を出して息をすることも忘れない。

「わっ、かわいい……♡♡」

おどおどしていた表情がふわりと華やぐ。女性の頬はほんのりと染まっていたけれど、瞳の奥にちらりと炎が揺らめいていた。

「次はおれがしたい！ この前もやっただけでしょ！」

「わたしも、わたしもやっていい？」

続いて名乗りを上げたのは、僕よりも年下の少年少女。このクラブで働いている子供たちだった。なんでも、調教の様子を幼い子供たちに見せつけたいというお客さんの要望に応えて雇い入れたそう。変わった好みを持つ方もいるんですね……とご主人様にお話したら、どういうわけだか苦笑なされたのを覚えている。

「まあ、君たちでも構わないが……」

ご主人様が若干言葉を濁したことなど気にも留めず、男の子はきらりと顔を輝かせた。

「よし、じゃあおまわり！」

「わんっ」

その場で小さくぐるぐると回る。以前は上手く出来なかったけれど、今は四つん這いでも思う通りに動けるまでになった。

「わたしは、えーっと……伏せ！」

「わうっ」

女の子の言うがままにぺたりと伏せる。剥き出しのお腹が床に触れ、背筋がぶるりと震えてしまった。男の子が吹きだし、続いて女の子も笑い始める。

けれども周りの大人たちは少々違う反応を見せていた。どういうわけだか息を飲み、どよめく様子が気配で分かる。特に経験豊かな方々ほど、だ。子供たちとは真逆の反応が、正直不思議でなかった。

「すげーな。こいつおれより年上だろ？」

「ふつうこんなことできないよね。本物のワンちゃんみたい♡」

二人のくすくす笑いが耳を撫でていく。ふつう、というのはよく分からなかった。僕がご主人様に精一杯お尽くしするのは、太陽が昇って沈むくらいに自然で当たり前のことなのに。

僕達を静かに見守っていたご主人様が、不意にトンツと肘掛けを叩いた。

「ああ、一応言っておこう。もしこの子に指一本でも触れようものなら……」

「わ、分かってますってえ！」

途端、女の子の声が上ずった。男の子はぎゅっと股間を押さえこむ。この前のことを思い出したのか、みるみるうちに彼の額に冷や汗が浮かび上がった。

「それともう一つ……こいつ、じゃない。この子は私のものだ」

ご主人様の声下がった。滅多に見せることのない底冷えする声色。男の子の顔が真っ青に染まった。

「い、い、ごめんなさい……っ！ー！」

深々と頭を下げると、二人はそそくさと引っ込んでいった。

「あの。私、まだやってみたいことがありまして……もし良かったら……」

続いて声をかけてきたのは、先程おすわりを命じてくれた女の人。右手に黒いソックスを握りしめ、うずうずと瞳を輝かせていた。ご主人様が頷いた途端、彼女の頬はふわりとほころびる。

「ありがとうございます！ それじゃあ……取っておいで！」

細い腕が弧を描き、丸めたソックスを放り投げる。艶やかな薄布は空中でほどけてふわりと舞った。

「ワンッ！」

鳴き声とともに走り出す。床の硬さに膝が痛みを覚え始めたけれど、そんなことは些細な問題。舞い落ちたソックスの元へと一目散に駆け寄った。唾液で汚してしまわないように、唇でばかりと咥え上げる。ご主人様のおみ足とは違い、甘い香水の匂いが強く立ち上っている。……ご主人様の香りのほうが、僕はよっぽど好きだった。

振り返ってご主人様と女の人を見上げると、見事なまでに違った表情を浮かべられている。ご主人様は何も変わらず、涼やかな御顔で佇んでいらつしやる。一方の女の方は頬を染め上げ、口元もすっかり緩み切っていた。身体中から喜びが溢れ出しているのが見て取れるくらいだ。

お二人の元へソックスを運ぶ。甘く囁かれたありがとうございます、の一言に、僕は大きく鳴き声を上げた。

「ご褒美におやつをあげてもいいですか？」

「ああ。これをやるといい」

ご主人様が懐から取り出したのは、素朴な丸いクッキーだった。僕が上手く芸をこなせたときに、いつも下さるご褒美の証。どくと大きく胸が高鳴る。口の端から涎が垂れ落ちた。

「ありがとうございます。ワンちゃん、どうぞ♡」

そっと床に置かれたおやつを前に、立派なペットの証明を前に。

「わう、わんっ！」

一声の鳴き声だけを残し、僕はぱくりとかぶりついた。ほんのり甘くてやさしい味。舌の上で溶けていく感触に目元が潤み、ぶるぶると腰が震え痺れる。

甘い一瞬を味わい尽くし、僕はご主人様たちを仰ぎ見る。うっとり僕を見下ろす女の人と、静かに僕を見守ってくださるご主人様。思わず喉がこくりと動いた。

「くうん……♡」

甘え縋りたい気持ちがあるまま零れ落ち、媚びるような響きを帯びる。女の人はそつと口元に手を当てた。

「かわいい……っ♡」

笑みを零したのも、褒め言葉を口にしたのも女の人だけ。分かりやすく反応してくれたのは女の人だけ。一見するとご主人様は澄ましたままだ。けれども、ご主人様の眉がほんの一瞬だけ蕩けたことが僕にははつきりと見てとれた。多分……それに気付けたのは僕だけだっただろう。

「さて……もういい時間だ。そろそろ帰るぞ」

「わんっ、わんっ♡」

入れ替わり立ち代わり集まる人の前で、犬としての姿を存分に晒し続けてかなりの時間が経った頃。ご主人様が立ち上がってそう告げた。ごくごく僅かに高揚したお言葉に、軽くリードを引く感触に、思わず鳴き声が高鳴ってしまう。

すると、遠巻きにこちらを眺めていた女の子がしずしずと歩み寄ってきた。レースがあらわれた上質なドレスに、透き通った青い眼と縦ロールの金髪が輝きを添えている。かなり最初のうちからずつとこちらを見つめながらも、一度も声をかけてはこなかった人だ。従者らしき壮年の男性を連れている。

女の子はご主人様の前へと立つと、恭しく一礼してにこりと笑った。仕草の端々から気品が溢れ出している。

「お初にお目にかかります。お噂はかねがね。お聞きした通り……いいえ。お聞きした以上の素晴らしさでしたわ。感激いたしました」

「ありがとうございます。中々の犬だろう？」

明らかに高貴な家柄のお嬢様であろう少女の前に、ご主人様はさらりと受け答える。何も変わらない淡々とした口調に、かえって僕のおちんちはくつくつと煮立っていく。

「中々、だなんてとてもありません。素晴らしい子ではありませんか！　こんな調教はそうそう出来るものではないでしょう？　いつか私もこんな愛らしい犬を育てたいものですわ」

お嬢様は頬に手を当て、敬意と羨望の混じった眼差しでご主人様を見つめる。おちんちんどころか、僕の身体中がみるみるうちに沸き返っていった。

「ところで……イカせるところは披露して下さらないのでしょうか？　これだけよく馴けておられるのなら、さぞや無様かつ下品なイキ狂い様かと……♡」

蒼い瞳がちらりと僕を窺った。先走りでねとねとに汚れた亀頭に、ぴんと反り立った竿に、淫靡な視線が絡みつく。

「ああ、まあ……そうなのだが。流石にここでするにはいささはばかれてな」

いたって冷静、いかにも平静。ご主人様の言葉は傍からはそう聞こえる。きっと誰もがそう思うだろう……僕の他は。

「あらまあ……それはそれは。とびきりの一瞬、貴方様だけのお時間。ということですね。素敵ですわね」

僕の惨めな絶頂と、それを見下し蔑むご主人様を想像したのだろう。お嬢様の顔がとろんと惚けていく。

「わう……♡♡」

声が零れる。抑えがきかない。今すぐにもご主人様に駆け寄りたい、媚びて縋って、そして……♡ そんな衝動をどうにかねじ伏せ噛み殺す。爪が食い込むほどに拳を握っていないと、身体が勝手に動いてしまいそうだった。

「そんなところさ。というわけで……今夜はこれにて失礼するよ」

落ち着き払った別れの言葉。けれども、ほんのりとリードから伝わってくるご主人様の震え。僕のおちんちんも応えるようにびくと跳ね上がった。

重い扉を静かに開ける。ランプの光が照らし出すのは、この世で最も安らげる場所の入り口。ご主人様の家、その玄関だった。

「鍵、しっかりとかけておくんぞ」

ご主人様の声は熱病に犯されたように火照っていた。口籠りながらもお返事をして、震える指で鍵をかける。ちゃんとかかったかどうかを三回確かめ、僕は詰まった息を吐きだした。

書物の匂いがここまで漂う。一方、ランプの音以外は何も聞こえない。今は他に誰もいない。ご主人様とぼくの……二人つきりだった。

そっと、そっと。震えながらも振り返る。ご主人様と向かい合う。いや、向かい合おうとした。

「ふ、ふふふ……ッ♡」

すらりとした長身をかがめ、ぼくの目の前へと顔を寄せて。夕焼けの色に染まったご主人様の頬が、潤み揺らめく翡翠の瞳が、ぼくの視界を埋め尽くす。するりと腰に回された腕。たまたまが縮む。太ももがひとりでに開いてしまう。そして、次の瞬間。

「……♡♡♡」

しなやかな柔らかさが、確かな強さでぼくを抱きすくめていた。腰を、お尻を抱えられて。軽々と子供みたいに、赤ん坊みたいに抱き上げられる。いや、いつそ子犬かなにかみたいに……っ♡

「あつっ！！ りや、りやめええ……ふわああ………っ♡」

絹の滑らかさ。うっすらと香る甘さと、その奥から感じる汗の匂い。むにむにと受け止めて下さる柔らかな身体と、その下で脈打つしなやかな筋肉。何よりも……ご主人様のあたたかさ。それら全部がぼくを包む。無様に開いた太ももの間、さっきまでびくびくと震えていたおちんちんとたまたま。ぼくのいちばんよいところが、ぼくのとってもだめなところが、ご主人様に押し当てられて。ご主人様のお腹に押し付けられて。ぎゅうつと隙間なく、甘く優しく押し潰されて……っ♡

「んあ、ア、あつ、あひいいいっつっ♡♡♡」

タガが外れた口元。白目を剥きかけひくつく眼球。涎が飛び散る。血潮が煮立つ。でも、しっている。これは……ただのはじまりなんだ。

「ほんとうに、ほんとうに、ほんとに……かわいかった……♡」

「~~~~~っつッ♡♡♡」

耳元、じゃなかった。耳に触れて。耳孔に直接囁きかけて。鼓膜に触れて練り込むように。ご主人様の湿りそぼった息がぼくを犯す。溶ける。蕩ける。溶かされて……っ♡

「可愛らしかったぞ、愛おしかったぞ、愛らしかったぞ……っ♡ いい子だな、素敵だ、ああ、ああ……っ♡」

脳味噌が溶けていく。溶かし崩され落ちていく。一声一声、一言一言。ご主人様の声はみるみるうちに欲情に浮かされていく。誰かの前ではあんなに凛々しいご主人様が。誰よりも格好いいご主人様が。ぼくと、ぼくなんかと、ふたりっきりのときだけは……。

「だいすきだぞお……っ♡」

もう、声なんて出なかった。肺の空気はとくに絞り尽くしていた。ご主人様の両腕にどどん力が籠っていく。吐き戻しそうな締め付けなのに、嬉し涙が止まりやしない。ばたばたと宙を掻きもがいていた手足に必死で命じる。両手を、両足をきゅっと回して。ありったけ、絞り出すようにご主人様のお身体へしがみつく。すがりつく。肩にお腹に抱き縋る。女の人がある時は、カニばさみなんて言ったりもするらしいけれど。男がある時はなんて呼ぶんだろう？ 心が溶けてなくなりそうなくらい、どろどろになって全てをお委ねする甘えかた。こんな天国を言い表す言葉が無いなんて、なんだかすぐく勿体ないように思えた。

「ふふ、ああ……っ、こんなにしてえ……♡」

「おおおっつっ♡♡♡」

そつと身体を揺すられて、ぐちゅぐちゅおちんぼがぬちゅんと擦れる。誰にも聞かせられない、ご主人様にしかお聞かせ出来ない嬌声……いや嬌音。

「ずつと大きくしていたものな♡ もう辛いよな、苦しいよなあ。いいんだぞお♡」

とろみが増したご主人様の声。どろりと粘つきたまたまの全身。焼き切れ焼け付き暴走する。心も身体も何もかも。蜂蜜を煮詰めてザラメを混ぜて、仕上げに粉砂糖を振りかけたような……心を焼き焦がす鮮烈な甘さ。ご主人様の、愛の味。

「んっ♡♡♡」

一気にぎゅつと。腰を押さえて背中を抱えて。ぴとりと一つになるほどに、ぼくは、ご主人様に抱き締められた。

「~~~~~つつつつ♡♡♡」

視界が崩れる。天井を仰いだ目は開いているのに、目に入るものがわからない。口がいつぱいに開く。舌がつる。肩が外れそうだ。背骨がぎしぎしと悲鳴を上げる。苦しい……からじゃない。カラダの芯を進る快感の濁流に晒され、内側から削がれ削られ砕け散りそうだからだった。

それでも一つだけ、確かに分かることがある。それを掴み握って杖にして、全ての力を腰に注ぎ込んだ。

ながい、ながいご抱擁。ご主人様の首筋を一筋の汗が伝い、魅惑の匂いがより一層濃くなった頃。ご主人様は腕の力を緩められた。解き放たれた肺が死に物狂いで空気を取り込む。息なんてものが無ければ、いつまでだってご主人様に抱き締め続けて頂けるのに……。

「いい子だな、本当に良い子だ。キミは私の自慢だ……♡」

「あ……」

降ってきた言葉。抱擁が緩んだことで視線が合う。再びご主人様と見つめ合う。嗜虐の光はどこへやら。森の泉を思わせる瞳には、母性のぬくもりと淫らな情炎、そして女性らしいおやかな愛情が渦巻いていた。端正な口元はだらしく緩み、零れた唾液で口紅が滲んでいる。お食事の時ですら、ご主人様が口紅を乱したことなど一度も無いのに。それなのに……っ♡

「ごひゅじんひやまあ……♡♡♡」

涙に涎、鼻水まで垂らして呼びかけるぼくを。こんなぼくの頭を、ご主人様が撫でつけて下さるなんて。髪の毛越しでも手のひらの熱が伝わってくる。ご主人様の体温が、ぼくの全部を包み込む。

「しかし、よく我慢出来たな。正直驚いたよ」

甘さはそのままに、ご主人様の瞳に仄かな理性が灯る。

「そのお、折角用意して下さったタキシードと、こんなに綺麗なご主人様のドレス……汚したくなくて……」

回らぬ舌を引きずるようにして、必死に言葉を紡いでいく。ぼくが一言お答えすること
に、ご主人様の御顔があたたくふやけていく。

「そうか。キミは本当に、本当にいい子だな♡」

「えへへ……♡」

頭を撫でて下さる手のひら。伝わってくるご主人様の鼓動。ぼくは両手にきゅっと力をこめた。

「でもお……」

美しい御顔も、甘やかな表情も、抱き締めて下さる優しさも。何も変わらぬはずなのに、背筋がぞわりと痺れ震えた。変わっているのは……瞳と声色。絡め取るような、ねっとりとした色香が溢れ出ている。

「あつ……」

今になってようやく気付く。股間に感じるとろりとしたなにか。咄嗟に腰を引こうとした瞬間。

「すこおし、おもらししてしまっただろう……♡」

「~~~~♡」

撃ち抜かれた。射すくめられた。淫らに煌めく翡翠の瞳に、奥の奥まで見透かされた。弱っちいのがばればれの負けマゾペットには、身も心も捧げたご主人様の所有物には、目を逸らすことすら出来なくて。そもそも……したくなくて。

「ぴゅくり、とほんのちよつとだけ。オナニーで我慢できなかった時みたいにとろおりと、おもらしちーちー……してしまっただよなあ♡」

ご主人様の御顔がぼやけて滲む。とろとろに蕩けて見えるのは、きつと涙のせいだけじゃなかった。

「あ……あひつ……ごひゅじんしゃまあ……♡」

腰がぐいっと押される。へっぴり腰で逃げようとしていたおちんちんが引き戻されて、どうしようもない喘ぎが零れる。ぼくを包み込む手のひらが、頭をぎゅうっと抱き込んだ。「いいんだぞお、おもらしくらいしてしまふよな。当然だよな♡ 私はてっきり、全部漏らしてしまふだろうと思っていたんだ。ほんのちよつとに抑えられただなんて……凄いぞ。偉いぞ。立派だな……♡」

「~~~~♡♡♡」

濡れた呼吸が鼻まで届く。火照った頬を撫でていく。あまい。あまい。こわれちゃいそうに……あまい。力強く抱き着きたかったけれど、手足が焼け溶けたように言うことを聞かない。何も出来ないあちゃんみたいに、すりすりとは縋りつくだけで精一杯だった。

「我慢してくれたんだな。おもしろくないようにって頑張ってくれたんだな。でちゃうよおうってアヘイキすれば楽だったのに、たっぷり気持ち良くなれたのに。私のために必死に必死にこらえてくれたんだな。嬉しいぞお……♡♡♡」

もう、声も出ない。音も出せない。飲まれて、浸かって、溺れそうで。耳から言葉が。目からは笑顔が。鼻から匂いが。身体中からぬくもりが。伝わり染み込み酔いしれる。ぼくのぐずぐずの笑顔を見つめて、ご主人様はごくりと喉を鳴らした。

「それじゃあ……これ以上おもらししてしまう前に、だな♡」

粉雪のように真っ白なシート。こんなぼくには本来不釣り合いな、とろけるように柔らかいお布団。仰向けに寝転がり、大きくM字に両足を広げて。まるでおしめを替えてもらう赤ん坊みたいな恰好。両手を開いて、口を開けて。首筋、喉元、胸元、脇腹……そして股間。ほそくちいちゃんおちんちんと、よわよわのだらしないたまたま。その下でひくつくおしりの穴まで。何もかもを晒して、曝け出して、ご主人様に媚を売るような。服従のポーズ。屈服の証。隷従の証明。でも……さつきとはちょっとだけ違った。

にゅぽおっ！　ぐちゅうう……っ！　じゅぞぞおっ、にゅっぽんっ！

「りやめえええっ……♡　ひにやあ、あああつ、あひいいんっ……！！」

響き渡るはしたない水音。それに重なる悲鳴のような嬌声。鳴いているのは当然ぼくで。

「あ、あへえっ、おお……おおお……ッッッ♡♡♡」

舐めしゃぶって下さるのは勿論、ご主人様だった。ぐちゅぐちゅ、ぬちゅぬちゅと激しい水音。ぼくの股間に覆いかぶさり、犯すような激しさで責め立てる。あたりに漂う愛液の匂いは、ベッドを覆う天蓋に閉じ込められてみるみる濃密になっていく。

ぐばあと開いたご主人様のお口。普段は小さく気品に溢れるそこは、今や竿どころかたまたますらも咥え込む性器へと姿を変えていた。ぷるりと潤う唇が根元とたまたまを締め付ける。だだ洩れの唾液が滴り続け、股間どころかお腹やふともも、おしりまでもを濡らしていた。視界の端で揺れ動く茶髪とつむじが、視覚からもフェラチオの激しさを刷り込んでくる。

「ん、ん……っ♡　」

「ひいいいいん♡♡　やらあ、ああ……あええ……っ♡」

ご主人様のくぐもった声。直接股間へ、おちんちんへと響く音。鼻から零れる息と合わさり、まるで空気越しの愛撫だった。焼き切れそうで、気が狂いそうで、いやいやと首を振ったのもつかの間。

にゅとおおお……っ♡

「……………っ♡♡♡♡♡」

今度は一部の隙も無い密着。舌が、頬が、唾液に満たされた口内が、おちんちんを舐り尽くす。尖った舌先がたまたまをつつき転がし、裏筋はやさしく撫で擦られて、さきつばはきゅうつと抱き締められるようで……っ♡

ばたつく両手がシーツを掴む。ちからいっぱい握りしめる。握りたかったわけじゃない。そうしなかったら壊れてしまう。狂ってしまう。なんだっていい、よすがが無いと本当に……っ♡

ふとご主人様の舌が緩み、たまたまへの刺激が止まった。つかの間の休息に必死で息を吸い込もうとした瞬間。

ぐぢよおおっ……っ♡

「あえええええっ!!!!!!」

力の抜けた柔らかい舌が、カリ首をねろりと舐め回す。たまたまは唇でぎゅうつと抱き締められて、くすぐったさの混じった気持ち良さが這い上がるように広がった。カラダの力は抜けきっているのにおちんちんだけは固く硬く大きくなって。たまたまが縮み、ぎゅつとシワが寄るのが分かった。腰も、背中も、もう碎けてしまいそうで。

「おねが、りやめれしゅう、もれひや、あああああっ!!」

響き渡った甲高い叫び。頭の中に火花が散って、そして、そして……っ♡

くばあ……っ♡ と水音が響いた。おちんちんが、たまたまが、ひやりと冷たい空気で包まれる。一切の刺激が……消えた。

「あ、あへえ……ひうう……♡」

動けない。もしも身動きなんてしたら漏らしてしまう。おもらし、してしまう。くつくつと煮え立つ精液が、おちんちんの根元で渦を巻く。少しでもなにかが起これば、それこそ毛先がそつと触れるだけでも。きつとびゅぐびゅぐとおもらしてしまう。

「ふふふ……っ♡」

聞こえてくる笑い声。首だけ動かしご主人様を窺う。口元をしっかりと押さえて、ぼくに息の一つもかからないようにして下さりながら。それでもなお分かりすぎるほどに、悦びに溶け崩れた美しい御顔。

ご主人様が身体を乗り出す。両手について、ぼくの身体へ覆い被さる。糸も纏わず素肌を晒して、揺れるお胸を僕へと見せつける。しっかり両手を伸ばした四つん這い。決して

ぴゅくう、と漏れ出した精液と共に、無様なイキ声が零れ落ちる。おちんちんとお腹がべつとりとねばつき、混じった汗でどこもかしこもぐちよぐちよ。鼻水まで垂れている顔は、とてもご主人様にお見せ出来ない惨めさで……。

「ああ……っ♡」

そつと顔を上げたご主人様が、ぼくのトロ顔を間近で見つめる。顔を逸らす力も、目を瞑る気力すらも残っていない。でも、ご主人様は……今日一番の笑顔と共に口を開く。

「愛しているぞ……っ♡」

びゅくうっ！と、漏れ出したさいごのおもらし。そつと満足気に頷くと、ご主人様はぼくの頭を撫でて下さった。

「ん、ん……っ♡」

「♡♡♡」

ふにり、と唇が触れ合う。やわらかな感触とご主人様のぬくもり。目を閉じているからか、いつもよりくつきりと感じる匂いと息遣い。添い寝をして頂けるだけじゃなかった。

背中と頭を抱き寄せられて、手足をご主人様のお身体にきゅつと絡ませて。ゆつくりと穏やかに流れる、けれど射精にも等しい幸せなひと時。

「ん……ふう。ふふふ……♡」

「ごしゅじんさま？」

そつと離れた唇、静かな笑い。ぼくが目を開けると、鼻先が触れ合うほどの距離にご主人様はいて。

「愛しているぞっ♡」

ぼつ、と音が鳴った。ような気すらした。頬が染まる。胸の奥が熱く火照る。

「ぼくも……ぼくもですっ♡ ごしゅじんさまを……愛しています……♡」

もつれる舌で紡いだ不格好な言葉。それでもご主人様はとろんと目元を緩め、今度はおでこへ口付けて下さった。

「うん……嬉しいぞ。両想い、というやつだな」

「えへへ……ごしゅじんさまあ……♡」

身体の芯から湧き出す熱。口付けて頂いた唇から、おでこから、みるみる広がる甘い疼き。すっかり惚けてすり寄るぼくに、ご主人様は悪戯っぽく笑いかける。

「それにな。さっきの射精……いや。おもらしだな。可愛かったぞ……♡」

わざわざ、いや。きつとあえて言い直しながらぼくの頬をつつく。

「あ、あれはあ……あんなときに仰るだなんて……ずるいですよ……」

「ふふっ。最後の最後にあ言ったら、きつと気持ち良く漏らしきれるだろうと思っ
な」

うつすらと涙を浮かべたぼくをさして気にも留めず——最も、ぼくもはずかしいのが幸
せなのだけれど——、ご主人様は目を細められた。

「ご、ごしゅじんさまあ……」

「大変だったんだぞお？ 抱き締めている時も、囁きかけている時も、キミが必死に我慢
している時も……ずっとずっと堪えていたからな。今にも狂ってしまいそうだったんだ♡
お陰で……この有様さ」

こくり、と息を飲んでしまった。ぼくのすねへと絡みつけられたご主人様の太もも。押
し当てられた大切なトコロ。その割れ目は未だに熱い雫でくっしよりと湿り、とろけそう
なほどに熱を帯びていた。

「だから、その分だ」

ご主人様の右手が迫る。ぼくの目元をそつと撫ぜる。溢れかけていた雫を掬い取り、そ
のまま頬を包み込んで。ぼくの心臓がひと際大きく脈を打つ。

「愛しているぞ……♡」

幾度も幾度も頂いた言葉。何度頂いてもなお、少しも色褪せることなくあたたかいお言
葉。胸が詰まって、上手く声が出せなくて。浮かんた笑顔はくしゃくしゃだったけど、そ
んなぼくを胸元へと引き寄せて。ご主人様は抱き締めて下さった。ふつくらと丸い胸に埋
もれて、大きなお身体に包み込まれて。身体中からご主人様の体温が伝わってきて。文字
通り、一つになったみたいだった。

けれど、伝わるからこそ分かってしまうこともある。

「ごしゅじんさま、その……やっぱり、まだ……」

女性らしさの象徴であるおっぱいに顔を埋めているのは、どこまでも幸せだったけど。
身体中を余すことなくご主人様に包み込んで頂けるのは、何よりも安らぐ時間だったけれ
ど。それでもぼくは顔を上げた。おっぱいから離れてでも、ご主人様との間に隙間が出来
ようとも構わない。おずおずとご主人様の御顔を見上げる。

「ごしゅじんさま、まだ……」

ぼくの言葉は途中で止まった。ご主人様の指が、唇を軽く押さえていた。

「続きはまた明日、だ。明日も休みだし、何よりキミはもうへとへとだろう？」

でも、と小さく首を振る。ご主人様のお股からは、今なお絶え間なく蜜が零れ落ちてい
るのだ。

「今夜は昂ったままで過ぐすとするさ、それもたまには悪くない。自ら焦らして焦らして、一晚中でも焦らし抜いて……うん♡」

三日月のように口の端を吊り上げた笑み。唇を舐める真っ赤な舌先。色気が溢れる、というよりは……盛った獣のような剥き出しの情欲。目を奪われて、目を見開いて。ご主人様に囚われて。

「だから、先に眠っていいぞ。私はキミの可愛い寝顔を眺めながら、甘美な生殺しを愉しむでしょう」

でも。ぼくへ向けて下さる気遣いも、頭を撫でて下さる手つきも、まぎれもなく心優しいご主人様の本心だった。素肌から伝わるご主人様の鼓動が、ぼくの鼓動を甘く蕩かしていく。

「勿論……明日は覚悟しておくんだぞ♡」
にやり、と笑ったご主人様に。

「は……はい、はいっ♡」

大きく頷き応えてみせる。ご主人様の腕が動く。ぼくはもう一度、ご主人様の胸元へと導かれる。ぼくも腕を回して、脚を回して。ぴったりに寄り添い抱き纏る。

「おやすみなさいませ、ごしゅじんさま」

くぐもった声。ご主人様に響くように、お身体から心へ染み込んでくれるように。

きゅっと抱き着き言葉を重ねる。

「これまでも、これからも……ずっとずっと、愛しています……っ♡」

ご主人様がふるりと震えた。腕の力をほんの少しだけ強め、ぼくの耳へとお口を寄せて。

「ああ、私もだ。おやすみ……♡」

ぼくはそっと瞼を閉じた。両目の端から、幾筋かの雫がすうっと流れ落ちていった。

この先は製品版にてお楽しみ下さい！